おわりに

それでは、今日の話の全体をまとめていきましょう。

「地球」は外側から見ると全体の3分2が水に覆われた「水球」です。人類のほとんどは陸地に生きていますが、陸地でも水のないところでは生活できません。大地の上に住みながら、水は必須なのです。基本的に生物は水によって生きているのです。

ところが、私たちは「湯水のように使う」すなわち、「金銭を惜しげもなくむやみに費やすこと」ですが、この言葉で代表されるように、水を無尽蔵なものだと考えてきました。21世紀は水の時代だといわれています。これは水資源には限りがあり、その資源をいかに活用するかが重要問題として浮き彫りになってきたことを示します。

私たちはさまざまな災害に見舞われますが、その中でもっとも怖いのは旱魃ではないでしょうか。それなのに、私たちは旱魃の恐さを全く実感していないのです。家庭における水管理は主婦の最も重要な役割でした。家に遠くから水を運び、それを常に用意することは大変なことで、先ほど触れた弘法大師伝説で弘法水の話が出てくるのは、この水を得ることが難しかったことの一端を伝えています。

私の幼かった頃、私の住んでいた集落では私の家の横に井戸があり、集落中の女性が洗い物などに集まってきました。お風呂に水をくむのもバケツでしたので、その労力は大変でした。つい近年まで、日本国内においてさえ、水道の蛇口をひねれば水が出てくるのが当たり前の世界ばかりではなかったのです。家の中で蛇口をひねればいつでも水が使えるのは、日本人の歴史の中で最近年の、最後の一

瞬によって達成されたことなのです。世界的に見たら、まだまだ蛇口をひねればそれで好きなように水が使える世界は少数です。

沖縄の井戸

しかし、水道の水も旱魃になれば用いることができないのです。日本でも夏になると断水情報が流れます。それも地球温暖化の中で、雨の降らない地域は増えているのです。私たちの日本は食糧の6割をも輸入しています。しかし、よく考えてみてください。食糧を作るためには大量の水が必要です。アメリカの穀物生産地では大量の地下水を汲み上げて、農作物を育成しているのです。その結果、水が枯渇してきているのです。食糧輸入というのは、形を変えた水輸入だということを、胆に念じておくべきです。

旱魃によってのみ、水が使えなくなるわけではありません。水そのものが汚染されて、人類にとって害をなすものに変わることもあります。その一つが、化学物質による汚染です。今でも山の中に入れば、ゴミの不法投棄が目につきます。人目につかないで、車から簡単に落とすことができる谷間には、さまざまな物が不法投棄され、場合によると人知れず土がかぶせられ、そのままに放置されています。そこからじわじわと、化学物質が水にとけ込むことは十分に考えられるのです。かつて人が住んだ山間部は過疎化に見舞われてい

ますので、目につけなければいいのだとばかり、都会から持ちこまれた産業廃棄物の捨て場になっているのです。私たちが生み出したゴミが元で、命の水が汚染され、結局私たちの生命に危険をもたらすかもしれないのです。水が駄目になれば、人類のみならず、多くの地球上の生命が生きていけないことを、もう一度想起しましょう。

人間は水を完全制御することができないだろう、と私は考えます。日本人は長らく水を神様からの贈り物と考えてきました。弘法水と称する水は、聖なる人からの贈り物だったのです。人間はさまざまなものを作り出しました。しかし、人間が滅ぼしてしまった多くの生物種は再生することができません。水は化学方程式を前提に作ることが可能になりましたが、人間の思うとおりに大量の水を作り出すことはまだできません。人間は神ではありませんから、自然を思うように動かし、司ることができないのです。人間は万能でなく、また人間だけが地球上の特別な生命でもないのに、思い上がりもはなはだしく、地球上のすべての生命の頂点に人間がいて、特別な生き物だと考える者が多いようです。自然と共に生きることをしてきた日本でも、欧米型の教育を推し進めた近代以降、こうした考え方が一般化し、水に聖性を感じることも減ってきているようです。

人類は戦争をはじめとして、自ら多くの災害を引き起こしています。人類の活動は人類にのみ影響を与えるのではなく、地球上すべての生命に影響を与えています。人類の傲慢（ごうまん）さが、地球上の多くの生命を危機に引きずり込んでいることを、私たちは忘れてはいけません。人類が滅ぼしてしまった種は実にたくさんあるのです。

水は大気の循環を前提にして、私たちの周囲をめぐっています。諏訪信仰にも明らかなように、水は天空から雨となって大地を潤し

ます。その水は地下を通って地上に姿を現し、池や泉となり、川となって下流に降り、海になります。この間、蒸気となり風（空気）を媒介として天空に上がり、再び雨となって大地に降ります。諏訪信仰は水と風の信仰ですが、各地の山岳信仰にも同じ要素が見られます。日本人は長らく循環する水の意識を抱き、そこに神秘を感じ、信仰の対象としてきたのです。

実態としての循環する水は、常に続いています。先ほども触れましたが、山村の谷間に捨てられたゴミは、このままでいくと地下水汚染の原因となり、やがて飲料水から我々の体へ入り、海や川では魚を汚染し、食糧を通しても人類を危機的な状況に追い込む可能性があります。

循環する水の中で、大地と海をつなぐ血管のような役割を果たしているのが川です。水に対する特別な信仰と相まって、川は神聖な場として意識されてきました。水も川もあの世とこの世をつなぐ能力があるとされ、川や川原は神仏と交わることのできる場と考えられていました。そのことを前提にして、川原では市が開かれたのです。

そうした神仏との接点である川や水を統御すること、これが治水であり、その手段の主体が堤防でした。だからこそ、そうした装置を造ることができるのは、人間と神仏の中間に位置する聖なる人、弘法大師に代表される特別な宗教者、特別な能力を持つ者でなければいけなかったのです。おそらく中世までの人たちなら、大地を切り裂いて道を作ったり、井戸を掘ったりする時には、大地の神などに許しを得たり、行為をすまないことだと考えていたことでしょう。ところが我々は、山の中に道を作り、山を傷だらけにしても、それ

を正当な、当たり前のことだ、便利になった、より進んだ社会になったとしか考えなくなっているのです。人間の奢(おご)りの意識が大地をずたずたに切り裂き、多くの生命に地形的な打撃を与えていることを、もう一度思い起こしましょう。

川の水も人間のためにあるのであって、その利活用こそが重要だと考えています。そこには、神の恵みとして水をいただいているのだとする、かつての日本人が抱いた水の意識は微塵も感じられません。このように、自然などに対して恐れや敬虔の気持ちを失ってきたこと、他の生命を奪うことを何とも思わないことが、果たして進歩なのでしょうか。このままの状況でいくと、自然界からの反撃は、地球温暖化を含めて、極めて大きなものになることでしょう。

堤防は人類が自らの生活を守るために造った巨大な防災装置です。これは人間にとって有効な手段ですが、人類以外の生命にとっては、災害になっている可能性もあります。ダムによって鮭の遡上はできなくなりました。長野県では大変な費用をかけてカムバックサーモン運動を起こしましたが、それは運動者の自己満足だけで終わり、ほとんど帰ってきませんでした。コンクリートに囲まれた流れの中で、多くの昆虫が姿を消しました。魚も同様です。水の中から出てくる蛍は、現在各地でその復活が叫ばれていますが、これは特別な例で、目立たないかつて当たり前だった昆虫が消えても、それほど注目すら浴びません。動物や昆虫、魚、植物などをなくなってから復活させるのは大変なことです。

本来川も自由に蛇行し、川原を好きなようにつくって、流れの場を変える生き物のような動きをしていました。けれども、堤防によって流れを制限され、堤防から流水があふれ出ることが悪いことだ

と、人間の側から評価がされるにいたったのです。川が神仏との接点だという意識があった日本人が、聖なる川をこのような形で、コンクリートで押し込んでいいのかと、時々考えます。これからコンクリートによる閉じこめる治水から、どのような形で治水をしていくかが、大きな課題になるでしょう。その際、かつてあった霞堤の技術や意識が重要な鍵になるかもしれません。

いわゆる信玄堤・霞堤の特徴は、水との共生にあるようです。川の水を完全統御しようとするヨーロッパ型の治水から、自然と共生する日本型の治水への回帰が、今後必要になるかもしれません。その意味では、かつてあった日本のさまざまな文化や技術をきちんと確認し、その意義などについてしっかり位置づける必要があるでしょう。

生命と財産を維持するためには、人間の側からすると堤防が必要です。それには川の上流から下流にかけての全体像の中で、将来の地球環境を考えて計画を立てる必要があります。先に長野県知事だった田中康夫氏は脱ダム宣言を致しました。私はその理念を素晴らしいと思います。しかしながら、政治家は実際に県民の命を守る義務があります。いくら理想を述べても、住民の命を守って理念を実行できる的確な手段を示さなければ、何の意味もありません。彼の場合、その手段を明示しないまま、言い放しだったようです。行政の責任者として地域住民の生命と財産を守ることは最低条件です。その部分が明示されなかったので、県民は結局知事としては失格だと、選挙で意志を示したのです。

治水でもっとも大事なのは共同する心です。水害及びそれへの対応は、みんなの問題です。一人の力ではどうにもなりません。みん

ながが共同して力を合わせ、多少の無理をしなくては解決できません。現状で国土交通省は100年に1度の水害に備えようと、ヨーロッパ型の堤防を築き、水を一定範囲の河川に閉じこめようとしています。その必要経費は大変なものですし、メンテナンスの費用も膨大です。それだけに利権の温床にもなっています。オーバーフローを前提とする霞堤方式は、堤防を高くする必要がないので、費用は安くすみます。その代わり、水があふれ出ますので、一部の人に必ず被害があります。ただ直接流れが襲うのではなく、上流からあふれ出る水ですので、水圧などは現状の河川決壊から見たら少なくてすむでしょう。また、そのままにしておけば水は川に戻ります。

これからはどんなに費用がかかろうともすべての人を守る堤防をつくるのか、それとも費用を少なくして、一部の人には水害の可能性があること認識して、水害対策をするのか、考える時期にきています。私としては最初からここは水がオーバーフローする場所です。その代わり税金はこれだけ安く、またいざという時にはこれだけの補助をしますというふうに、しっかりと情報を流し、守るべき地とそうでない地とを分けることも必要ではないかと考えています。こういうことをするために

洪水の女鳥羽川（松本市）

も、住民一人一人の治水への意識が大切です。かつては堤防を守ると言えば、地域に住む者は何を置いてでも参加しなければいけませんでした。現状では行政任せの感が強くなりました。もう一度地域とは何か、共同体に参加するとは何か、こう言ったことから考えねば、水害などに対処することはできないでしょう。

間違いなく、大きな洪水は個人や地域の対応力を越えます。その時に必要なのは、災害地を越えた公意識の共有です。みんなが助け合うことを前提にしないと、解決策は生まれません。その舵取りは行政が遠い将来を見据えてしていく必要があります。それに際し、水害などがかつて起こった場所には、再び災害が襲う可能性のあることを認識しましょう。地域に残る災害関係の史料をきちんと分析すると同時に、地域に残る災害伝をも大切にしたいものです。さらに、かつて地域では防災のためにどのような技術が蓄積されてきたか、もっと光を当てていきたいものです。そこから、新たな防災へのヒントが出てくるかもしれません(笹本正治『災害文化史の研究』、高志書院、2003 年)。

歴史の大きな流れで言いますと、災害に対応することは、自助(自らの力で自分を助ける)から共助(周囲の人たちが共同して助ける)、さらには公助(公が責任を持って助ける)という状態へと進んできました。ところが、小泉元首相の「自分の身は自分で守れ」ということの強調は、再び自助の社会の構築に向かっているようにも考えられます。一方で水害などの対処は、行政任せだけでは駄目で、個人個人の義務はきちんと果たさなければいけないことも事実です。

いずれにしろ、現在のように財政が逼迫している時、防災経費をいかに捻出し、どのような体制で防災するかは大事な問題です。換

言するなら、国民の安全性をいかにして少ない費用で担保するかが行政側に突きつけられた問題です。一方的に、堤防をつくってやるとお恵みのように実施するのではなく、この方法ならこれだけの費用がかかり、どのような利点とどのような弱点があるかを示し、住民に選択の可能性を示すぐらいの情報を流すべきです。行政は理念をもって、住民の側に立ちながら防災に当たっていただきたいものです。

災害はいつ来てもおかしくありません。とりわけ、地球温暖化はこれまでの経験を外れる巨大な災害を引き起こし、人類のみならず全地球上の生命をも危機に直面させる可能性があります。これまで100年に1度の経験といってきたことが、全く役に立たないかもしれないのです。

日本は食糧の約4割しか自給しておりません。残りの食糧については、これまでのようにずっと輸入が可能なのでしょうか。これから日本が食糧を輸入してきた地域で旱魃が進む一方で、かつては食糧を輸入していなかった中国などが食糧輸入を始めました。食糧生産が拡大しない中で、それを求める人たちは増えているのです。こうした状況下、日本は今後とも安定的に食糧を供給できるか、大変不安です。食糧輸入は水の輸入です。日本はまだまだ水が豊富にあるのですから、この点からも国民の生命の安全と富の保証を政府に望みたいものです。その際、生命のすべての基礎にあるのは水であることを再度喚起したいと思います。

これで本日の講演は終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。